

「市民のための科学コミュニケーション」 とは何か

立花浩司

日本学術会議若手アカデミーは、2020年9月にシチズンサイエンスの実践にあたり解決すべき課題を、提言「シチズンサイエンスを推進する社会システムの構築を目指して」として取りまとめた。NHKでも、2021年にシチズンサイエンスを行うためのオンラインプラットフォーム「シチズンラボ」を立ち上げ、科学研究が研究者だけに閉じたものでなく、市民参加で進められるものでもあることが社会で広く認知されるようになりつつある。

一方、「社会・国民に支持され、成果を還元する科学技術」を看板に掲げた第3期科学技術基本計画(2006～2010年)の頃から国内で普及し始めたサイエンスカフェ等の科学コミュニケーション活動の取り組みは、必ずしもシチズンサイエンスの文脈の中から生まれたものではなく、シチズンサイエンスの普及と必ずしも関連づいているものとも言えない。

そこで本特集ではまず、2017年から日本心理学会の理事としてシチズンサイエンスプロジェクトに取り組んでいる研究者、2004年にイギリスのカフェ・シアンティフィック(サイエンスカフェ)についての現地調査を実施し調査報告書を取りまとめた研究者と、従来の科学コミュニケーションの枠を超えるシチズンサイエンスの可能性と今後に向けた対話をテーマに掲げた座談会を試みた。シチズンサイエンスの実例と、科学コミュニケーションを含むシチズンサイエンスのこれからの可能性をさぐる上でのナビゲーションになるのではないかと期待している。

特集論文「科学技術コミュニケーションとシチズン・サイエンス——専門家政治と民主政治の断裂を越えるために」では、シチズンサイエンス(あるいは「市民科学」)が時代によって異なる文脈をもつ

用語であることに言及したうえで、科学者コミュニティにとってのシチズンサイエンスの価値について述べている。科学者コミュニティ、シチズンサイエンスに関わる市民がこのことについてどれだけ自覚的であるかはわからないが、それぞれに期待されている役割を知ることによって意識することもあるのではないだろうか。

特集論文「「弱者」を主語に」では、福岡市科学館を例にとり、科学コミュニケーションにおける市民と科学者の関係が「弱者」と「強者」の非対称な関係にあることが所与のものであることを前提に、「弱者」である市民を主語にすることで見えてくる意義とその優位性について言及している。これは、市民のための科学コミュニケーションを意識した場づくりのための基本的な考え方を示している。

特集論文「サイエンスカフェの意見交換は相互行為においてどのように達成されるか」では、実際に行われたサイエンスカフェを例に、フラットで開かれた場所であることを目指すサイエンスカフェにおける権威主義的な関係性を完全に排除することの困難性に触れるとともに、よりフラットな関係性を担保するにはどうすれば良いかといった工夫の重要性について言及している。

その他、サイエンスカフェのみに限定せず、市民のための科学コミュニケーションにつながる活動の担い手もしくはウォッチャーが実践事例について独自の視点から書き下ろしている。これから読者の皆さんが科学コミュニケーション、シチズンサイエンスに参加するための参考となれば幸いである。

(たちばな・こうじ：ナレッジサイエンス・ラボ、
知識科学)